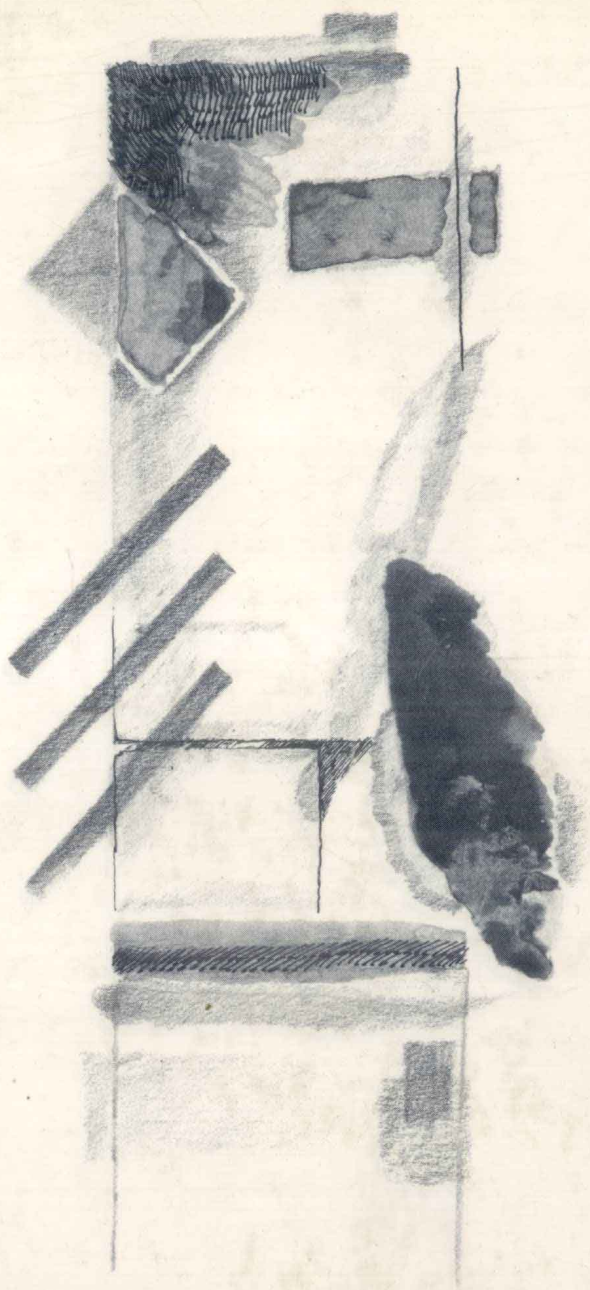


ナ・ゼ？ ナ・ゼ・デ・ス・カ……



寄村仁子

著者略歴

寄村 仁子（よりむら とよこ）

1943年、大分県に生まれる。

1972年、県職員（教護院・児童相談所勤務）を辞めフリーになる。

1974年、「歩みの会」を発足させ、代表として現在に至る。



ナ・ゼ？ ナ・ゼ・デ・ス・カ……

一九八四年五月三十一日発行

定価 一四〇〇円

著者 ◎寄村 仁子

発行者 原田 奈翁雄

発行所 株式会社 径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二一三十五 影山ビル

電話 〇三―三三―四六〇八（編集）

〇三―二六―三七〇一九（営業）

振替口座 東京 一三三二七二六

印刷 明和印刷株式会社

製本 京美印刷株式会社

株式会社 積信堂

ナ・ゼ?

ナ・ゼ・デ

ス・ま……

寄村仁子

ブック・デザイン

山口

泉

はじめに

国鉄日豊線を、大分県から福岡県に向って走ると、県境の山国川を越えてすぐのところ
に三毛門駅^{みけかど}がある。その無人駅のプラットホームから、北に数百メートルで豊前海をめぐる堤防にゆきあたり、南に数百メートルのところを国道10号線が国鉄に添うように走っている。線路をはさんで両側には一面の水田が広がっていて、10号線を抱くようにして一群の民家が寄り集まっている。

その民家の北側の一角、三毛門駅から見通せるところに田中邦治^{くにはる}さんの家がある。

邦治さんは、脳性マヒによる障害を負った三十一歳（一九八四年現在）の青年である。

両親と二人のお姉さんと一緒に暮している。

障害の状況は、身体障害者手帳で言えば重度一級。マヒが全身に及んでいるため、動きまわること、話すこと、食べることなどすべての行動がむずかしい。

それでも九年前に出会った頃には、一人で三輪自転車をこいで、自宅の近くに出かけていたのに、今では、車イスを押してもらわなければ出られなくなった。

施設などですつと訓練を続けて来たにもかかわらず、骨の変形や筋のこう縮が進んで、寒い時期には関節が痛んだりもするようになってきた。

現在、邦治さんは、春になって、身体の痛みがやわらぐのを待って、自宅から三十キロほど離れた、大分県宇佐市にある「みんなの家」に通って、仲間たちと陶芸を始めるのを

楽しみに、家にこもっている。

この記録は、邦治さんと私（歩みの会の主な活動の場である「みんなの家」の留守番役として、日夜訪れる人たちの相手をしながら、障害を負う仲間たちと、その家族や友達や、そうでない人たちとも、ずっとつながりあって生きてゆくことができないかと、手さぐりし続けている）が、九年にわたって、時には非常に近く、時にははるか遠く、近づいたり離れたりしながらつき合ってきた、そのプロセスである。

五年前に、『くにはるがかいた』として発行されたものがベースになっていて、それに邦治さんと私のまわりの歩みの会の仲間たちの歩みを添えたものである。

書き進めながら、以前の私が、思った以上に混乱の中にあつたことが分り、当時の私の目で見えたことを確かなこととして記していいのかどうか迷ってしまうこともあつた。

また、教師として邦治さんの前にいる私と、仲間の一人としている私とが分ちがたく混じり合つて、どう表わしていいのかわからなくなることもあった。

いずれにしても、二人でたどってきたところをありのままたどりなおすしがなく、未熟で、思い上つていた自分に気付かされながら、ともかくやり終えたいとの思いに支えられて筆を進めて来た。

そして、今さらのように、邦治さんと出会つたことの有難さと思う。彼に会っていなければ、さらにどうしようもない私になつていたに違いない。

目次

はじめに	4
強烈なまなざしとの出会い	9
書きはじめた邦治さん	15
求めつづけた「がっこう」	32
小さい青春	44
書くことは、生きること	64
ぶつかりあい	81
歩みの会事務局新築	99
不調の日々	109
血縁を超える関係	115
仲間を求めて	129

ナ・ゼ？ ナ・ゼ・デ・ス・カ……

146

日記を本に……

158

大分「みんなの家」

167

あの人を想う

180

施設に入る

202

本ができた

210

新しい「みんなの家」

219

さらに遠くへ

230

ようやくスタートライン

239

あとがき

250

「歩みの会」の歩み

252

強烈なまなざしとの出会い

田中邦治さんとはじめて会った日のことは忘れられない。

あれは一九七五年（昭和五十年）の四月の半ば頃だったろうか。

それまでに知人のOさんから邦治さんの家庭教師に行ってあげてほしいと何度も頼まれていたのに、なかなか決心がつかなかったのは、邦治さんが子どもではなく、二十二歳の大人だったからだ。その日Oさんから、邦治さんがずいぶん待っていると聞かされてから、断るにしろ一度会ってか
らと思って、知人宅からの帰りにお家を訪ねた。

彼は、テレビの前の掘りごたつに座っていた。脳性マヒのために不安定な上半身をゆらゆらさせながら、前に座って、「こんにちは」と声をかける私を、期待とあきらめと恨みの混じりあったような、あの何とも言えないまなざしでじいっとみつめつけた。

ほとんどまばたきもせずに無言でみつめるその視線の強さに、初対面で気おくれがしている私は、かける言葉を失ってしまった。

そばに居るお母さんとあいさつを交わす間も、彼は私から目を離さない。

ようやく氣をとりなおして「学校に行っていないんですね」と言ったとき、彼の瞳は怒りと悲しみで一瞬血走ったようになり涙があふれ出た。

言葉が役に立たないとき、人はどんなに必死の思いで、自分の胸の内を伝えようとするか、それまでの障害を負う人たちとのつきあいの中で分かっていたつもりだった。

けれど、それがどんなに薄っぺらな分り方だったか、この日改めて知らされる。

私の一言一言で、彼の瞳の表情はほんとうに敏感に変わった。私も緊張してしまって、言葉が続かない。しばらく沈黙が続く。

ふと彼の背後の窓に目をやる。「ここからあの枝に来る小鳥がよく見えますねえ……」と誰に言うともなくつぶやいたら、そうよとばかりうなずいて、邦治さんはとてもおだやかな優しい顔になった。一瞬ほっとした。

このあともまた、じいっと私の顔を見つめつづけた。その間に私が何を言ったのかはよくおぼえていない。

帰りぎわまで、家庭教師を引き受けるかどうか決断がついていなかった私は、迷いながら、しどろもどろに言った。

「もうあなたも青年だから、先生と生徒でなく、お互に人間同士ということできましよう」と。その時どうしてか彼は激しく怒った。あとで考えれば全く正当な怒りだったとわかるのだが、その時の私は、意味がわからず、たじろいでしまう。言葉が言えないので、目をむいて、「うーう」と声をあげながら私をにらむ彼に、「どうしたんで、なんで怒っちゃうの」とお母さんが尋ねて下さる。

邦治さんは自分の頭を指さしてから、指で三つと合図する。

「ああ、大人じゃないちゅうんじやな。学校に行っちゃらんからね」とお母さんが通訳して下さって始めて、彼の言おうとしていることが少しわかる。

「ごめんなさい。大人の勉強の相手をするのははじめてだから、どう考えたらいいのかわからなくて……」

そう言うとき、邦治さんは、悪かったと言うような顔をして、また私の顔をのぞき込む。

私はさきほどの衝撃から抜け出せず、内心やつぱり荷が重いなあと思いながら座っていた。

そんな私の気持ちをよそに、お母さんと邦治さんは、「よかったね。これからずっと勉強ができるんよ」と喜びあっている。

帰る道々、車を運転しながら、どう言って断ろうかと考え続けた。まさかあの視線に耐えられそうにないなどとは言えないが……。

正直、あの目でみつめ続けられるのはしんどいなあと考えた。

そう思う一方で、学校のことを言ったときの邦治さんの、心の中に抱き続けてきたもろもろの思いのこもった涙が、強く心をとらえていた。

訪問をはじめのを少し先に延ばす理由は、さがせばあった。

その年の一月に仲間と一緒に借金で建てた「みんなの家」のための募金に走り回らなければならぬ。それで、定期的にとられる時間をできるだけ増やしたくなかったし……。

その頃、私は県（児童相談所）を辞めて、生活のための家庭教師をするかたわら、「歩みの会」の仲間づくりに取り組んでいた。

歩みの会というのは、心身にハンディキャップを負う人達を中心にしたグループで、知恵遅れと言われる人、自閉症と言われる人、脳性マヒ……などなど、さまざまな障害を負う人と、その家族、そして家族ではない人も一緒に、弱い人も誰も共に生きてゆくことを目標に、どうしたら共に生きられるかを、日頃の生活の中で模索し続けてゆこうとする者たちの集まりだ。合宿やキャンプやいろんな行事をやりながら、まずお互のことをよく知りあうことからくりくみ始めて、できれば生涯つながりあって生きてゆこうとしているといったらいいのか、そんな、それぞれが、さまざまな形でつながっている「群れ」のことだ。

自分の部屋に帰ってから、邦治さん宅でのがずっと心を離れずに、誰かに話さないと、頭の切り換えができそうになかった。

夕方たずねて来た、県にいる頃からの友人で歩みの会の仲間にも加わってくれた山本さんをつかまえて、その日のことをしゃべった。まるで支離滅裂に。

「もうねえ、あの視線はすごいよ。まるでほったをつき抜けてゆくみたいなんだから。」

言葉はほとんどしゃべれないけれど、こちらの心の底まで見透かされている感じなのよ。

それにねえ、一度も学校に行かせてもらえなかった悲しみや、うらみつらみがごたまぜになって、胸の中にたまっているみたい。ほんとに何を言ってもそこにさわるみたいよ。

あんな敏感な人の前じゃ、口先だけのきれいごとは全く通用しないよね。………………。

私、自信ないなあ」

いつになく私がしゃべり続けるので山本さんはびっくりしたような顔で黙って聞いていた。しゃべっているうちに私はだんだん落着いて、考えも帰りの車の中とは少し違ってきた。

「彼はね、お母さんを『ぼくを学校にやってくれなかったから、ぼくはバカになった』って責めるんですって。お母さん、それが一番つらいって言ってた。」

私がね、『あなたも青年だから……』って言ったら、ものすごく怒ったのよ。身ぶり手ぶりで『身体は大きいけど、勉強してないから三つと同じだ』って。お互に大人だからと思って言ったんだけど……。



「じてんしゃ」に乗る邦治さん

彼にとっては、私が家庭教師を引き受けるかどうかが大問題なのに、お互に人間どうしで、なんか言われるので、遠まわしに断られたような気がしたんでしょね。それにしてもびっくりした。とにかく緊張してしまつて……。いつもああいうふうだと恐いなあ」

「はじめてだから、あなたがどんな人間だか見定めようと、彼も真剣だったんじゃない。いつもはそれほどでもないと思うよ」

一通り話し終る頃には、断ろうかという気持ちは消えていた。とにかくめぐりあったんだから、そしてあれほど求められているんだから、あとはやりながら考えるしかない。そう思った。

数日後にたずねて行ったときは、ほんとうに嬉しそうだった。横からお母さんが「朝からずっと、本当に来てくれるじやろうかと言いつつ通して、興奮きみなんですよ」とおっしゃる。

書きはじめた邦治さん

さて、家庭教師といっても、何からどう始めればいいのか全く見当がつかない。

「あのねえ……。私は教師の免許は持っているけど、普通の学校に勤めたことはいんです……。以前、教護院というところに勤めていたとき、小学生ばかり十五名のクラスを教えたことがあるけれど、学校のようにはやれなかったから……。」

普通の学校で習うような勉強にはならないかもしれませんが。あなたにとっても、私にとってもはじめてのことだから、うまくゆかないことなんかもあるかもしれない。その時は、その都度やりなおしをしながら進めていこうと思うけど、それでいいですか？」

そんなふうに自分のことを紹介しながら了解を求めた。

邦治さんは二十二歳になる今まで、学校に一度も行っていない。だから、彼の学校に寄せる思い